

「授業改善のための学生アンケート」2021 年度前期 顕彰授業における工夫

2022 年 2 月 21 日

白百合女子大学 FD 推進委員会

2021 年度前期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。授業のあり方は授業の数だけありますが、顕彰された授業における工夫を知ることにより、よりよい学びのためのヒントが得られる機会になればと願っています。

【参考】顕彰の対象となったアンケート項目は以下の 7 項目です。

- Q3 この授業に主体的に取り組むことができましたか。
- Q4 この授業の内容を十分に習得できたと思いますか。
- Q7 教員の説明の仕方はわかりやすかったですか。
- Q8 教科書や配付資料など、教材は適切だったと思いますか。
- Q11 学生の質問や相談に対して、教員は適切に対応していたと思いますか。
- Q13 この授業の目的や到達目標を十分に理解できましたか。
- Q14 この授業の内容に興味を持つことができましたか。

少人数部門

「フランス語実践研究 A」 高野 優（文学部フランス語フランス文学科） 2021 金 3 前

この授業は出版を想定した〈実践的な翻訳〉を教える授業です。学部で学生の皆さんに翻訳を教える場合、難しい問題がふたつあります。

1) 語学のレベルが翻訳をするのに十分であるとは言えないこと。翻訳は語学が基本ですので、原文の 9 割くらいは語学的にきちんと読む必要がありますが、よくできる方でも、なかなかそこまではいきません。その結果、90 分の授業の半分以上の時間が語学的説明に費やされてしまう恐れがあります。けれども、翻訳をするには、語学的な解釈をもとに文脈的な解釈を行い、解釈した内容をそれにふさわしい日本語で表現する必要があります。したがって、授業では文脈的な解釈や日本語の表現にも時間を割きたいのですが、語学的な説明で終わってしまうと、その時間がとれません。

2) 学生の皆さんは、翻訳の初学者ですので、語学的な訳文をつくりがちです。つまり、直訳的な訳文になってしまいがちです。また、日本語として自然な訳文を目指す場合も、辞書の訳語や原文の構文から十分離れることができず、結局はフランス語を日本語に訳すだけの翻訳になってしまいます。けれども、出版を前提とした翻訳では、そうしたいわば語学的な翻訳ではなく、原文で書かれた内容を日本語で伝える翻訳が求められます。フランス語を訳すのではなく、フランス語で書かれた内容を訳す——作品を訳すのです。その点をどうやって学生の皆さん伝えるか、それが問題です。

ということで、授業では、1) の問題を解決するために、あらかじめテキストで語学的な解説を行い、授業でも翻訳をする前に、語学的な解説と、ある程度、文脈にまで踏みこんだ解説をして、学生の皆さんが訳文をつくる時点で、原文の内容がほぼ頭に入っている状態になることを目指しました。翻訳の全工程を 10 とした時、0 からではなく、5 からやってもらう感じです。

2) の問題を解決するためには、児童向けの物語をテキストにして、そこに登場するキャラクターが実際にイメージできるように、ぬいぐるみ等の人形を使いました。物語のなかでは、登場人物たちがさまざまな目的、感情を持ちながら、動いたり、話したりします。作品を創るということは、その人物たちが生きている世界に読者を連れてくるということで、それは翻訳でも変わりありません。そのためには訳者がまずその世界に入りこむ必要がありますが、人形を使えば、学生の皆さんが登場人物や物語の世界を具体的にイメージできるようになり――その結果、フランス語を日本語に訳すのではなく（つまり、言葉から言葉に訳すのではなく）、フランス語で書かれた〈物語の世界〉で起きていることを日本語で伝えることができるのではないかと考えました。

また、翻訳の授業の半分は全員に向けての解説ですが、残りの半分はいただいた訳文をもとにマンツーマンで指導することなので、訳文はすべて添削し、コメントを添えて、お返しするようにしました。

最後にこの授業は出版を想定した〈実践的な翻訳〉の授業ですので、学生の皆さんの訳文を小冊子にまとめることにしました。といっても、翻訳に対する興味や意欲には差があります。そこで、全文を訳した方は個人訳の小冊子をつくり、毎回の担当課題だけを訳した方は、ほかの方と併せて、グループ訳の小冊子をつくることにしました。

多人数部門

「ビジネスナーとホビ° 列テ演習」 島田 由香（文学部英語英文学科） 2021 水2 前

この度は顕彰授業に選んでいただき光栄に存じます。

今年度前期は、対面から遠隔授業、また試験は対面にと授業形態が目まぐるしく変わった学期でした。遠隔授業で工夫した点は、皆が参加していることを互いに感じあえるようにした点です。学生に「嫌な人や環境的に難しい人を除いて、良かったらカメラをオンにしてください」と呼びかけました。Zoomのメリットとしては、参加者全員が同じ大きさで画面に表示されるので、皆で参加している気持ちになり、インタラクティブな場づくりができました。また、「ブレイクアウトルーム」を活用して、小グループに分かれて話し合いができることも大きかったと思います。

教員としては、Zoom リアルタイムで行うメリットを生かし、ラジオパーソナリティーや You tube のライブをする感覚でチャットに学生に書き込みを随時してもらったりとライブ感を大切にして、繋がっている感覚を大事にしました。

遠隔、対面ともに、工夫したことは、90分授業の初めの10分間を前授業のフィードバックをクイズ形式にしました。このことは復習になっていると考えられますと同時に授業の導入として、学生の授業に対する興味・関心・モチベーションを向上させるために最も重要な時間となったと思います。残りの時間は本時間の新しい単元の授業を実施しましたがその際「わかりやすい言葉で講義する」「身近な例を使う」「学生が興味を持ち、新しい発見ができる授業」などを心掛けました。学生が学問に興味を持ち、「もっと詳しく勉強したい」と学習意欲が湧くような授業を心掛けました。

積極的に授業に参加してくれた履修生たちにこの場をお借りして御礼申し上げます。